

カーアンの末裔

——『1891年パリのオランダ人』にみる
マルセル・シュウォブのユダヤ意識——

鈴木 重周

はじめに

十九世紀末フランスの反ユダヤ主義は、フランス社会への同化が進みつつあったユダヤ系フランス人たちのアイデンティティーをどのように揺り動かしたのだろうか。これまで私たちは、作家マルセル・シュウォブ（1867-1905）を中心として、反ユダヤ主義によって自己意識とは別のところから「ユダヤ人」と名指されたユダヤ系フランス人をめぐるさまざまな状況について考察を進めてきた⁽¹⁾。フランス文学史においては、博識と技巧とによって数々のコトを生み出した象徴派作家として知られているシュウォブは、アルザスの伝統的なユダヤ教徒の家庭にルーツを持つユダヤ系フランス人であった。ところが、シュウォブ自身は三十八年の生涯にわたって自らのユダヤ性についてほとんど何も語っておらず、文学テキストにおいて一度も「ユダヤ」、「イスラエル」、「セム」といった語を用いなかった。その一方で興味深いのは、生前のシュウォブと親しく交際した文献学者ピエール・シャンピオン（1880-1942）が、作家にとって最初の評伝である『マルセル・シュウォブとその時代』の冒頭でまず言及するのが、シュウォブに流れる「カーアン家」の血であるという事実である。

マルセル・シュウォブはラビや医師を何人も輩出した一族の出身である。一方には科学があり、他方には平安があった。

母の血筋によって彼はカーアン家に連なっている。厳格で優れた家系である。マルセル・シュウォブはよくこう語っていたものだ。「僕たちの呪いは、カーアンの子孫だということなんだ。もっとも、そのおかげで僕たちは愚か者にはならないのだけだ⁽²⁾」。

ユダヤ教の宗教指導者を何人も輩出したという「カーアン家」について、チャンピオンは同時期に編纂した『マルセル・シュウォブ全集』の序文において「アルザス出身の、フランスに友好的で教養あるユダヤ人の家庭である」と言及している⁽³⁾。チャンピオンによれば、シュウォブは自身が伝統的なユダヤ教徒の一族である「カーアン家」の出身であることを「呪い」と表現していた。しかし、それが単なる悲嘆や自己否定ではないことは、続く「そのおかげで僕たちは愚か者にはならない」という言葉からも明らかである。母方の家系を重視するユダヤ教の伝統に則るなら、「カーアン」はユダヤ人マルセル・シュウォブのもう一つの姓とも言えるだろう。シュウォブにとって、ユダヤ教徒の名門家系に繋がっているという出自は何を意味するのだろうか。

それをうかがい知ることのできる挿話を、友人のレオン・ドーデ（1867-1942）が書き残している。後に右翼政治団体アクション・フランセーズの中心人物となるドーデは、1885年にルイ大王校の同級生としてシュウォブと知り合い、両者はある時期までかなり親しく交際していた⁽⁴⁾。ユダヤ人と反ユダヤ主義者の友情は、フランス反ユダヤ主義の到達点ともいえるドレフュス事件（1894-1906）によって終わりを迎える。ドレフュス事件初期において、大いに世論の注目を集めた「見世物」^{スペクタクル}として知られる1895年1月5日のドレフュス大尉の軍籍剥奪式に『フィガロ』の特派員として立ち会ったドーデは、大群衆の前でサーベルを折られるドレフュス大尉を「彼にはもはや年齢がない。名前もない。顔色もわからない。それは裏切り者の色をしている」と冷酷に描いたルボルタージュ「懲罰」⁽⁵⁾を発表し、右翼論壇の若き論客として華々しく活動を開始した。事件の発生を契機として次第に反ドレフュス派、反ユダヤ主義者としての旗色を鮮明にしていくドーデは、当然のようにシュウォブと疎遠になっていく。軍籍剥奪式から二十年が経った後、すでにこの世にいないかつてのユダヤ人の親友に関して、ドーデはこう回想している。

マルセル・シュウォブはアナーキスト的な気性のユダヤ人であり、ドレフュス事件で人種の血が彼を心の底から揺り動かす日までは、自らの人種を憎んでいた。それ以前には、同胞との接触は彼にとって耐え難いものだったのだ⁽⁶⁾。

ドレフュス事件発生以前のシュウォブが「ユダヤ人を憎んでいた」ことを示

すため、ドーデは、エドゥアール・イニャスという「ヘブライ人の弁護士」に対して「同胞」である彼がとった態度を伝えている。1894年の夏、ドーデとシュウォブは共にヴァカンスを過ごすためイギリスのガーンジー島に滞在していた。そこで出会ったイニャスに、シュウォブは激しい不快感を示した。植民地で現地の住民に襲われ命を落とした友人をイニャスに侮辱されたと感じたためである。その夜、シュウォブはドーデにこう語ったという。「僕たちには二つの種族がある。主人たるカーアン (les Cahun)、そして奴隷たるレヴィー (les Lévy)。あのイニャスという奴は下のレヴィーだよ⁽⁷⁾」。ドーデの回想によれば、シュウォブはユダヤ人を「カーアン」と「レヴィー」という、それぞれ典型的なユダヤ姓を持つ二つの階層に分け、前者を主人、後者を奴隷と位置付けている。シュウォブ自身は母親から前者の血を受け継いでいるという理屈であろう。かつての親友ドーデが語るこの挿話は、シュウォブが自らに流れる「カーアン」の血を、ユダヤ人社会における特権的なものととらえていたことを伝えている。怒りのあまり「同胞」に対して差別的な言葉を投げつけたというシュウォブの姿が真実なのかを知る術は無いが、重要なのは、チャンピオンやドーデといった心を許した友人たちの前でシュウォブが時折見せたという、ユダヤ人としての自己意識をうかがわせる言動に「カーアン」という姓が関わっているということである。

シュウォブにとっての「カーアン」とは、チャンピオンの証言によれば優越感の入り交じった「呪い」であり、ドーデの回想によれば「同胞」を見下すことのできる根拠であった。テルアビブ大学のモニク・ジュトランは「ユダヤ人であることは、シュウォブにとって精神的貴族階級に属することであった」と述べている⁽⁸⁾が、自らのユダヤ意識について声高に語ることのなかったシュウォブであっても、アルザス・ユダヤの名門カーアン家の末裔であるという意識を、若干の優越感とともに持ち続けていたことは間違いないだろう。本稿では、この「カーアン」というユダヤ姓を手がかりにシュウォブのユダヤ人としての自己意識を探るため、オランダ人文献学者ウィレム・ビヴァンク (1848-1925) が著したルボルタージュに着目する。以下、シュウォブが深く関わった、今日ではほとんど顧みられることのないこの書物を考察の中心として論を進めたい。

1. 『1891年パリのオランダ人』とはどのような書物か

マルセル・シュウォブとウィレム・ビヴァンクの交友は1889年3月に始まる。1888年に最初のコント「三つの卵」（«Les Trois Œufs»）を発表⁽⁹⁾し作家としてのデビューを果たしたシュウォブは、この時期、パリ言語学協会に所属し、コレージュ・ド・フランスと社会科学高等研究院でフェルディナンド・ド・シシュールやミシェル・ブレアルの講義を受けながら言語学研究に没頭していた。言語学徒としてのシュウォブの研究テーマはフランソワ・ヴィヨンが出入りしていた盗賊団内部で用いられていた隠語と詩作との関係であった⁽¹⁰⁾。ヴィヨン研究の過程でシュウォブは、言語学協会副会長フランソワ・ボナルドからの教示によってライデン大学で中世の盗賊詩人を研究する文献学者ビヴァンクを知る。シュウォブはビヴァンクに、いくつかのヴィヨンに関する業績を読ませて欲しいとの手紙を送る。オランダ人文献学者は二十歳近く年下の若者の要望に応えただけでなく研究者として対等に接し、両者の文通⁽¹¹⁾は1905年のシュウォブの死まで続くことになる。シュウォブはビヴァンクから言語学研究の助言を受け、ビヴァンクはシュウォブを通してパリの文壇関係者と知り合うことになった。シュウォブからビヴァンクを紹介されたドーデは、後にこのオランダ人文献学者を「博識で明敏かつ正確な知性の持ち主である」と評している⁽¹²⁾。

シュウォブとの文通を重ねるにつれて、ビヴァンクは次第に、パリに赴いて作家、芸術家たちと直接交流したいという願いを持つようになった。この望みを叶えるため、シュウォブはビヴァンクをパリに招き、滞在中の一切の世話をすることになった。1891年4月7日からの約一ヶ月に渡るパリ滞在の体験記と、そこでの芸術家、作家たちとの会談のルポルタージュがビヴァンクの著書『1891年パリのオランダ人——文学と芸術の印象』である⁽¹³⁾。同書は1892年4月にオランダ語版が、その二ヶ月後にフランス語版が相次いで出版された⁽¹⁴⁾。フランス文学史において、作家や芸術家たちの生の声を伝える試みは、同時期に出版されたジュール・ユレ（Jules Huret, 1863-1915）による『文学の進化についてのアンケート』（*Enquête sur l'évolution littéraire*, 1891）がよく知られているが、実は、ユレのアンケートが連載されていた『エコー・ド・パリ』（*L'Écho de Paris*）でシュウォブは1890年から文芸欄を担当していた。自らが編集する『エ

『コー・ド・パリ』におけるユレの試みが、シュウオブに何らかの示唆を与えたことは想像に難くない⁽¹⁵⁾。

さて、シュウオブの最新の評伝作者シルヴァン・グドマールが「ビヴァンクの『1891年パリのオランダ人』はマルセル・シュウオブの著作でもある」と述べている⁽¹⁶⁾ように、同書においてシュウオブは著者ビヴァンクの黒衣^{くろこ}以上の役割を果たしていると言えるだろう。シュウオブは、ビヴァンクと芸術家たちとの会談の全てを設定し、全ての取材に同席した。つまり、ビヴァンクは自らの意志によってというよりも、シュウオブという案内人に従って十九世紀末のパリを歩き、彼に紹介された人物と会談したのである。さらに、『1891年パリのオランダ人』の内容そのものにもシュウオブの意向が強く反映されていることは、構成と人選からも明らかである。同書は二部構成で計十八名の人物がそれぞれの章の主題として登場する。ビヴァンクが取り上げた芸術家たちと、各章に付された副題は登場順に以下の通りである。

第一部：画家ウジェーヌ・カリエール（「タブローの展示」）、彫刻家オーギュスト・ロダン（「彫刻家のアトリエ」）、詩人カチュール・マンデス（「大通りにて」）、劇作家ジョルジュ・ド・ポルト＝リッシュ（「劇場にて」）、作家アルフォンス・アレと劇作家モーリス・ドネ（「シャ・ノワールにて」）、歌手アリストティード・ブリュアン（「ミルリトンにて」、「モンマルトルの丘で」、「民衆詩人」）、詩人ジャン・モレアス（「近代詩人」、「友の批評」、「ロマン語詩」）、詩人エルネスト・レイノー（「芸術家のアルバム」）、詩人ポール・ヴェルレーヌ（「前奏曲」、「会談」、「幸福」、「流謫の神」、「悲しみ」）。

第二部：東洋学者レオン・カーアン（「かつての世代」、「ハッサン」）、作家ジュール・ルナール（「今日の世代」、「我々はどこに向かうのか」）、画家クロード・モネ（「印象」）、詩人ステファヌ・マラルメ（「間奏曲」）、詩人ジャン・リシュバンと作家J-H. ロニー（「努力と風潮」）、作家モーリス・バレス（「一致」、「ある哲学者」、「ダンディーと詩人」）、作家マルセル・シュウオブ（「もう一人の哲学者」、「恐怖と憐憫」）、再びルナール（「芸術家の苦悩」、再びカーアン（「古の民族」）、再びバレス（「新しい時代」）、再びシュウオブ（「夜の中への帰還」）。

一見して分かるように、十九世紀末パリの文化を彩る錚々たる芸術家たちの

なかで、当時において明らかに知名度が劣るのが、シュウオブとその周辺の人物たちである。いくつかの著作があるとはいえ、ほぼ無名の図書館員であった叔父レオン・カーアン（1841-1900）と、まだ『根無しかずら』（*L'Écornifleur*, 1892）を発表する以前の駆け出しの作家である親友ジュール・ルナール（Jules Renard, 1864-1910）にそれぞれ三章が割り当てられていることは奇妙な印象を与えるだろう。叔父カーアンは「かつての世代」の代表として登場し、近著である子ども向け冒険小説『兵士ハッサン』（*Hassan le Janissaire*, 1891）について熱弁を振るう。一方、「今日の世代」を代表する新進作家として登場するルナールは、初の小説集『薄ら笑い』（*Sourire Pincés*, 1890）に描いた「にんじんという赤毛の少年」についてビヴァンクと語り合う。両者はシュウオブの計らいによって、ビヴァンクの著書のなかで近著について語る場を与えられたと言えるだろう。とは言え、同書において最も厚遇されているのはシュウオブ自身であることは間違いない。『1891年パリのオランダ人』におけるシュウオブは、若き大作家モーリス・バレスと並ぶ「もう一人の哲学者」として登場し、前年発表した最初のコント集『二重の心』（*Cœur double*, 1891）を主題に、そのテーマである「恐怖と憐憫」について語っている。そして、同書の最終部で再び登場しオランダ人によるパリ文壇の見聞記を締めくくるのだ。事実として、同書のフランス語版の出版にあたって、シュウオブは原稿のフランス語校閲から序文の依頼、出版社の選定までの作業を全て一人で行っている。それは、単にビヴァンクとの友情による奉仕というよりも、コント作家として文壇にデビューしたばかりのシュウオブが、自身が大々的に登場する『1891年パリのオランダ人』を宣伝活動の媒体としてとらえ、文壇での飛躍の機会としたいという意図があったと考えるのが自然だろう。出版にあたって大きな宣伝要素となる序文の書き手の選定についてもシュウオブがかなり戦略的に考えていたことが、ビヴァンクに宛てた書簡から明らかになっている⁽¹⁷⁾。出版と販売に際しての戦略とそれを可能にする編集者としてのシュウオブの能力は、パリの文芸誌『メルキュール・ド・フランス』や『エコー・ド・パリ』の編集に関わることで培われたものと言えるだろう。

フランス語版『1891年パリのオランダ人』は、アルフレッド・ヴァレットによる書評⁽¹⁸⁾など、シュウオブの知人からは好意的に受け止められたものの、そ

うではない人々からは冷笑をもって迎えられた。作家ユイスマンスはオランダの友人に宛てた書簡でビヴァンクを「フランス観光に来たお人好し」と書き⁽¹⁹⁾、バルナール・ラザールは次のように強烈な皮肉をもって違和感を表明している。

この本は私に何か痛ましい印象を与えるもので、読みながら作者に同情してしまった。ビヴァンク氏は私にとって、フランス文学とは何かをインタビューによって知ろうとわざわざパリにやって来たお人好しのオランダ人にしか思えないのだ。そこにつけ込んで、彼が偉大な人物に会いたいと求めると登場するのはシュウォブ氏であり、カーアン氏であり、マンデス氏なのだ。おまけに、この不幸なネーデルラントの住人は、かくもよく知られた登場人物たちについては、ありふれたことしか語らないのだ⁽²⁰⁾。

ラザールが「偉大な人物」ではない例として挙げているのが全てユダヤ系フランス人であることの意図は不明であるが、すでに詩人として成功を収めていたマンデスを除いて、シュウォブとカーアンという二人の名が一般の読者にとって唐突に映ることは間違いない。当時すでに文壇で活動し、『メルキユール・ド・フランス』や『ルヴュ・ブランシュ』(*Revue blanche*) 誌に関わっていたラザールは、著者として名が記されている「お人好しの」オランダ人の主体性の無さと、背後にいる編集者としてのシュウォブの存在を見抜いているのである。ラザールが正しく指摘するように、『1891年パリのオランダ人』が、何よりもまず、シュウォブ自身によるマルセル・シュウォブという新人作家の売り込みを目的の一つとした書物であることは否定できない。

2. 叔父レオン・カーアンのユダヤ意識

ここまで私たちは、ビヴァンクの『1891年パリのオランダ人』に「もう一人の著者」としてのシュウォブがいかに深く関わっていたのかを確認した。その後版を重ねることもなく、現在ではほとんど忘れ去られたこの書物は、それでもなお、シュウォブのユダヤ意識を探る私たちにとっては重要である。それは、シュウォブの母マチルドの弟であり、「カーアン」の姓を持つ叔父が、自らのユダヤ意識や「人種」について語る姿を同書が記録しているためである。マザリー

ヌ図書館の司書として一生を終えたレオン・カーアンの生の声を伝えている資料は他には存在しない。本節では、シュウォブの人生に大きな影響を与えた叔父カーアンのユダヤ意識について考察する。

1881年、マルセルはナントのリセ・クレマンソーからパリのルイ大王校に転校する。グラン・ゼコール受験を目的としたシュウォブ家の教育方針によるものだった。そこでマルセルの身元引受人となったのが叔父のレオン・カーアンである。レオンは当時マザリーヌ図書館の司書として勤務しており、図書館敷地内に居住していた。マラケ河岸のフランス学士院内という、きわめて知的環境に恵まれた場所でマルセルはパリの生活を開始したのである。叔父と甥の親密な交流は、1891年にマルセルが近所のユニヴェルシテ街へと転居してからも変わらず続いたことをレオンの娘が証言している⁽²¹⁾。現在、モンパルナス墓地には、レオン・カーアンとマルセル・シュウォブが同じユダヤ式墓石に眠っている。カーアン家の墓に埋葬されているシュウォブ家の人間はマルセルのみであることから、両者の強い絆を知ることができるだろう。十四歳でナントの親元を離れたマルセルにとっての親代わりの存在であり、作家に大きな影響を与えたレオン・カーアンの生涯は、ナントでマルセルの父と兄が社主を務めた共和派日刊紙『ロワールの灯台』に掲載された追悼記事から以下のように再構成することができる⁽²²⁾。

1841年にストラスブール近郊のアグノーで生まれたレオン・カーアンは、若くしてパリに上り、ジャーナリズムの世界に身を置いた。エミール・ジラルダンの『リベルテ』(*La Liberté*)に参加するものの、次第にナポレオン三世へ接近していく編集方針への反感から同紙を離れる。熱烈な共和主義者であったレオンは、皇帝失脚後はパリで志願兵として歩兵隊に入隊し、大尉として祖国のために勇敢に戦うが、パリ・コミュンに失望し除隊する。その後、レオンはシリアへ向かう地理調査隊に加わり、その過程でオリエントの魅力に取りつかれてしまう。帰国後はマザリーヌ図書館に司書として勤務しながら主に小アジアを専門とするオリエンタリスト東洋学者として活動を行い、その集大成として出版された『アジア史研究序説——起源から1405年までのトルコ人とモンゴル人⁽²³⁾』は高い評価を受け、その業績によってソルボンヌ大学でアジア史の講義を担当することになる。また、小アジアに関する膨大な知識と現地での体験を活かして、レオ

ンはいくつかの少年に向けた冒険物語を執筆した。とりわけ、異なる宗教共同体に属する少年たちがそれぞれの違いを乗り越えて活躍する『青い旗』⁽²⁴⁾は作家としてのカーアンの代表作であり、現在でも少年向け冒険物語の選集で読むことができる⁽²⁵⁾。叔父の博識と、時折語られる小アジアでの冒険譚、そして図書館の敷地内に居を構えるカーアン家の知的環境が若きマルセルを魅了し、彼の作家としての才能を育んだことは間違いない。

さて、『1891年バリのオランダ人』において、レオン・カーアンには三章が割り当てられている。いくつかの著作があるとは言え、本職は図書館司書であり文壇においても無名の人物へのこの扱いは、甥マルセルの口利き無しには考えられないだろう。「ハッサン」と題された章は全体が、レオンが出版したばかりの冒険小説『兵士ハッサン』^{イェニチエリ}に関する話題で占められている。かつて滞在していたアナトリアを含むトルコを舞台とした少年向け冒険物語である近著について語るうち、カーアンはふと、「人種」(race)という概念をめぐる以下のように語る。

人間を理解すること、そこに私の関心があるのです。心理学、倫理学といったそれら全ての抽象概念といったものは好みではないし、私の方法ではないのです。私は現地の人々と彼らの考えについておしゃべりすることを好みます。私は彼らの状況とともに彼らの人種を知りたい。私は人種によって特別な性質があるなどということは全く信じておりません。人種は単に人種として見なすべきです。しかし、その私が民族学者であるのは訳のないことはありません。人種、これこそ抽象概念なのです。いや、人間には適応し模倣する能力があり、宗教と社会による影響が人種とともに、生活方法や容姿など様々な価値を規則化し決定するのです。人間の本質を示すためにひたすら人種についてのみ語ることをしてはなりません。そこには常に正確な時代状況と彼らを取り巻く環境とが加わらなくてはならないのです⁽²⁶⁾。

「人種」を「抽象概念」(abstraction)と言い切るレオン・カーアンは、実際に現地に赴き、人々と接し、彼らと語り合うことが重要なのであって、決して概念のみで人間を判断してはならないと語る。ここには、当時の最先端の学問である東洋研究の人種論に対する批判が透けて見える。そもそものが、植民地獲得の必要性を背景としてヨーロッパの優位性を確認するための学問である人種論は、実際にそこに生きる人間との関わり無しにすべてを「抽象概念」によっ

て決定してしまう危険性をはらむものである。机上の学問としての東洋学への異議申し立てをしながらカーアンは、今日の目からみても至極まっとうな人間論を展開しているように思われる。フィールドワークを研究の基礎とする「民族学者」として、抽象概念よりも人間そのものが重要であると語るカーアンは、当時「セム」という異人種とされた「ユダヤ人」⁽²⁷⁾ についてはどのように考えていたのだろうか。日を改めての会談を再現した「古の民族」と題された章において、宗教をめぐるビヴァンクとの会話はカーアンのユダヤ教徒としての自己意識に及ぶ。

私にとって、家族、父と子の関係に勝る強い絆はありません。真のイスラエルの子孫であることを知るために私は犠牲を払ってきました。いったい誰が、長い歳月にわたって私たちの宗教と民族性を元のままに保ってきたとお思いですか。いつの時代にも、選ばれし民は父祖伝来の信仰を否認する誘惑にさらされてきたのです⁽²⁸⁾。

ここでカーアンが語っているのは、歴史上どのような環境においても独自の宗教文化を保持しようと努めてきたユダヤ教徒としての誇りである。彼にとって、「選ばれし民」としての誇りを担保するものがカーアン家に語り継がれる伝説であった。シュウオブの評伝作家シャンピオンは、カーアン家に伝わる先祖めぐる伝説を次のように伝えている。

母マチルド・カーアンはシャンパーニュ地方のカーン（Caym）家の子孫で、マルセル・シュウオブは母から聞いた思い出をよく話してくれた。一族の言い伝えによれば、先祖は聖王ルイの家令から授けられた一振りのサーベルを携えてジョワンヴィルと一緒に海を渡った者たちの一人だという。

彼らカーアン家はアルザス出身の、フランスに友好的で教養あるユダヤ教徒であった。曾祖父アンセルム・カーアンはホッホフェルデンの村で子どもたちにフランス語を教えていた⁽²⁹⁾。

シャンピオンが参照しているのは、レオン・カーアンが1886年に上梓した『ユダヤの生活』である。アルザスでラビを務めたカーアン家の祖先「義人」アンセルムを主人公とした『ユダヤの生活』は、アルフォンス・レヴィーの挿画を添えてアルザスにおけるユダヤ教徒の伝統的な生活様式を子どもたちに向け

て語りかける物語である。ヘブライ文学研究者ベアトリス・フィリップは、十九世紀後半になるとユダヤ教徒の民俗伝承を小説として著す「アルザスのイスラエリット」が増えてきたと指摘している⁽³⁰⁾が、カーアンの『ユダヤの生活』もこの動向に関連したものとみることができるだろう。ここで着目すべきは、子ども向けの挿話入り物語である『ユダヤの生活』に序文を寄せているのが、同じくアルザス出身のパリの首席ラビ、ザドック・カーン（1839-1905）であるという事実である。普仏戦争後のフランスにおいて次第に高まっていく対独復讐を想定したナショナリズムと、それに付随する反ユダヤ主義を前にして、ユダヤ教指導者としてのザドック・カーンは、フランコ・ジュダイズムと称される同化政策にユダヤ人社会の生き残りをかけた。フランス革命によって諸国に先駆けて解放されたフランスのユダヤ教徒たちは、その恩義に報いるために大革命を神話化し、良き信徒であると同時に良きフランス国民となることを目指した。この同化政策が、十九世紀後半のユダヤ系フランス人たちの自己了解の基礎となっていく。『ユダヤの生活』に描かれる、ルイ九世の命を受け十字軍として異教徒討伐のために海を渡ったユダヤ教徒や、アルザスの村でフランス語を教える祖先アンセルムは、十九世紀後半のフランコ・ジュダイズムにとって理想的なユダヤ系フランス人のあり方を体現しているように思われる。伝説が事実であるかどうかは問題なのではなく、カーアン家のファミリー・ヒストリーが、フランコ・ジュダイズムにきわめて親和性の高い形で十九世紀後半に改めて語られていることが重要なのである。

ユダヤ教徒であることによってフランスという国家との軋轢が生じることは、彼らにとって避けなくてはならない事態であった。『ユダヤの生活』において主人公アンセルムは、ユダヤ教の重要な祭日であるヨム・キップール明けの食事の際に父親が「全てをフランス民族のために」と祈りながら家族に料理を取り分けていたことを回想している⁽³¹⁾。また、同書序文においてザドック・カーンは「ユダヤ人の家庭においては、何世紀にもわたって宗教と家族とは親密な絆で結ばれてきました。それらを分かťことは困難なのです」と述べる⁽³²⁾。ザドック・カーンがユダヤ教信仰における家庭の役割を常に重視してきたことは先行研究の指摘する⁽³³⁾ところだが、それは、レオン・カーアンが「私にとって、家族、父と子の関係に勝る強い絆はありません」とビヴァンクに語ったこ

とでもある。両者に共通するのは、あくまでもユダヤ教徒としての生活を家庭という私的空間にとどめ、公ではフランスという国家に忠誠を誓い、良きフランス人として社会に同化することの表明なのである。さらにザドック・カーンは、「アルザス人はこれまでも、そしてこれからも人の倍フランス人であるし、アルザスのユダヤ人はそのさらに倍フランス人なのだ⁽³⁴⁾」と続ける。アルザス出身のユダヤ系フランス人は人の四倍フランス人であるという強烈な愛国心の表明は、普仏戦争の敗北によって故郷を喪失した後にフランス国民となることを選択したユダヤ教徒たち、常に敵国ドイツとの内通を疑われる可能性があった者たちの生存戦略であった。奇しくも『ユダヤの生活』と同年に発表され、瞬く間に反ユダヤ主義をフランス中に拡散したユダヤ人攻撃の書『ユダヤのフランス』において著者エドゥアール・ドリュモン（1844-1917）は、「怨恨と憎悪によって二重化した人種的知性によって、ユダヤ人種は戦争の少し前に、われわれに対するプロイセンのスパイを組織したのだ⁽³⁵⁾」、「ユダヤ人はあらゆる形でビスマルクに奉仕した。（中略）1870年8月19日付けの『ノール』紙が、「アルザスにいるプロイセンのスパイは、そのほとんどがユダヤ人である」と報じているとおりである⁽³⁶⁾」など、多種多様な言説によって繰り返しアルザスのユダヤ人を「ドイツのスパイ」に見立てた。アルザスのユダヤ教徒がこのような反ユダヤ主義言説をはねのけるためには、フランスへの愛国心をことさらに言い立てるより他はなかったのである。レオン・カーアンとザドック・カーンの『ユダヤの生活』は、一見、子ども向けの牧歌的な挿絵本でありながら、アルザス出身のユダヤ人をめぐる歴史状況を映し出すフランコ・ジュダイズムに則った「教科書」としての機能も有しているのである。しかし、アルザスのユダヤ教徒の努力も空しく、『ユダヤの生活』と『ユダヤのフランス』の出版から八年後、陸軍参謀本部においてアルザス出身のユダヤ系将校がドイツへのスパイ容疑で逮捕される。ドリュモンはアルフレッド・ドレフュスの逮捕を自らの予言の成就として喧伝するのである。

再び『1891年パリのオランダ人』に目を向ければ、カーアンはビヴァンクに、昨今の反ユダヤ主義的風潮について率直に懸念を語っている。良きフランス人たることを目標に同化に努めてきたレオンの世代のユダヤ系フランス人は、ドリュモンの著書が飛ぶように売れ、反ユダヤ主義言説が巷間に溢れるのを目の

当たりにして、戸惑いを隠せなかった。

「そう、驚くべきことは」レオン・カーアンは言った。「ユダヤ人たちが長きに渡って、彼らが暮らす国々の内部にすっかり取り込まれてしまわなかったということなのです。(…)ユダヤ人は、そのような模倣と適応の能力、あらゆる民族や文明の差異が直ちに消えてしまうような能力を身につけているのです。私は請け合ってもいい。ユダヤ人の方では、有益かつ快適なものをもたらした近代社会に対していかなる嫌悪感も持っていません。しかしながら、法律も根深い信念もはや対立してはいないのに、ユダヤ教徒とキリスト教徒の団結の精神がますます強まっているとは言えません。むしろ、双方の側にある種の後退かが見られるのです⁽³⁷⁾」。

先に見た「ハッサン」の章では「人間の本質を示すためにひたすら人種についてのみ語ることをしてはなりません」と語っていたカーアンが、ここでは「ユダヤ人」が持つ特殊な能力について語っているのである。誰よりもフランスのユダヤ教徒であること、そして「カーアン」の子孫であることに誇りを持つレオン・カーアンにとっては、ユダヤ人とは「模倣と適応の」特別な能力を有する人種なのである。しかし、「ユダヤ」であることを特別視するという点において、この自己意識は、ドリュモン流の反ユダヤ主義言説と接近してしまう危険性をはらむものでもあった。

3. シュウオブの人種観と「さまよえるユダヤ人」

さて、叔父がビヴァンクを前に率直に自らのユダヤ性と反ユダヤ主義への懸念を語る場にシュウオブは同席していたことを思い起こす必要がある。カーアン家の誇りを滔々と語る叔父とは対照的に、自らにも三章を割り振った『1891年パリのオランダ人』においても、シュウオブはユダヤ人としての自己意識に関して相変わらず口を閉ざしている。しかし、小アジアの民族について語る叔父が図らずも自らの「人種」観にふれてしまったのと同様に、同書においてシュウオブも「人種」という語を用いている部分を見つけることができる。以下に示すのは、「象徴派宣言」で知られるジャン・モレアスとの会談を終えたビヴァンクにシュウオブが語りかける場面である。

あなたは、私たちが、ゆっくりとかがうじて、そして常に思わぬ形でしか授かることのできないものを、モレアスが自然と状況からしっかりと授かっていることに気がつかなかったのですか。言ってみれば、二重の人格、二重の魂のことですよ、それは唯一私たちに世界の謎にまつわる何かを理解させるものです。

モレアスは、生まれによって、力強く素朴で、美を愛でるために創造された人種に属しているのです。その一方で、彼は若いころから成熟した私たちの文明（notre civilisation）の中心に身を置いて修養を積んでいます。彼は洗練された文化の異質な諸要素を、若者に特有の模倣の能力によって自らに取り込んだのです。しかしながら、彼の本性の、根底にある多様性は消し去られてはいないのです⁽³⁸⁾。

この場面のシュウオブは、自身のコント集のテーマである「二重」という語を引き合いに出しながら詩人モレアスについて語っている。ここでも「人種」という語が話題に上り、シュウオブは、モレアスの詩人としての特性を「生まれによって」説明しようとするのである。その見解は当然、詩人がパパディアマントプーロスという名を持つギリシア人であるという事実によって由来するものである。モレアスについて語るシュウオブが垣間見せる「人種」観は、それを人間の本质ととらえる点で、先に見たレオン・カーアンの言説、そしてそれと表裏一体である反ユダヤ主義言説に通じていることは明らかである。興味深いのは、「二重の魂」を持つモレアスの長所であるギリシア的なもの——力強さ、素朴さ、美を愛でる感性——に対比するフランス文化を、シュウオブが「私たちの文明」と呼んでいることである。外国に出自を持つモレアスに対して、シュウオブは自らをフランス文明の内部に位置付けている。しかし、そのようなシュウオブの認識は、時代が反ユダヤ主義へと急速に傾いていく中では許されないことであった。実際、『1891年バリのオランダ人』出版から約半年後、反ユダヤ主義日刊紙『リーブル・パロール』によって、シュウオブは文学テキストが「ユダヤ的である」と「生まれによって」判断されてしまう⁽³⁹⁾。

さて、同書の最終章、全ての会談を終えてオランダへの帰国の途につくビヴァンクとサン・ミッシェル大通りを歩きながら、シュウオブはふと「ユダヤ人」という語を発する。

「いや違います」。熟考の数秒間ののち、マルセル・シュウオブは言った。「辛い旅路の果てに放蕩息子、目の前に親の家を見えています。けれども私たちは、盲目的

な欲望に駆られ、未知のものへと向かって進んでいるのです。私たちに相応しいのは、放蕩息子ではないもう一つの象徴なのです。それは、アハスヴェリウス、さまざまのユダヤ人（Juif-Errant）の、休息なき旅人の姿なのです⁽⁴⁰⁾」。

自身のユダヤ意識について語ったものではないとは言え、作家としてのシュウォブが文学テキストにおいて「ユダヤ人」という語を用いたことが一度も無い以上、この場面は本稿にとって注目に値する。ここでビヴァンクとシュウォブは芸術家のイメージについて語っている。シュウォブにとって芸術家の象徴とは、遠い国に旅立ち、様々な経験を重ねた後に這々の体で父親の元に返ってくる放蕩息子ではなく、十字架を背負ったキリストを侮辱した罪で永遠の放浪という罰を科せられるユダヤ人アハスヴェリウスであった。ここに、カーアンの血を引き、反ユダヤ主義の時代を生きるユダヤ系フランス人としての自己意識が投影されていると考えることはできないだろうか。ビヴァンクの著書の中でシュウォブが唯一用いた「ユダヤ人」は、あくまでもアハスヴェリウスのことであり、シュウォブ自身のユダヤ意識と安易に接続して考えるべきではないだろう。しかし、自らのユダヤ性について語らないマルセル・シュウォブが芸術家の象徴として選んだアハスヴェリウスの姿には、この後、反ユダヤ主義の標的となっていくユダヤ系作家の姿を暗示しているように思われる。

シュウォブを案内人としたパリ巡りを終え、ビヴァンクはオランダへと帰国する。その後、1894年7月にシュウォブがドーデとともにハーグのビヴァンクを訪れてからは、両者が顔を合わせる機会は無かった。1904年9月28日、ハーグ王立図書館長となっていたビヴァンクは、すでに死の床にいた友人を見舞うため、サン＝ルイ島のシュウォブ宅を訪れる。ビヴァンクは、十年ぶりに再会したシュウォブについて「かわいそうなマルセル。善意に満ちた物憂げな眼差しの、丸い顔をした彼はもういない。今日、痩せこけた顔で一点を見つめ、歪んだ唇で大理石製のスフィンクスのような表情をしている彼を見るとは思いもしなかった。その顔は私が知っているマルセルのものではなかった」と書き残している⁽⁴¹⁾。それから半年も経たない1905年2月26日に、シュウォブは三十八年の生涯を終える。ビヴァンクはオランダの文芸誌『ガイド』にシュウォブの追悼文を発表している。亡き友に対する愛情に溢れた追悼文の中で一度だけ、ビヴァンクはシュウォブの出自にふれている。

彼は分け隔てのない思いやりを持った人間だった。彼のユダヤ人という出自——もっとも、彼自身は少しもユダヤ人たちに肩入れすることはなかったのだが——が、彼を周囲の人びとから遠ざけたのだ⁽⁴²⁾。

孤独な闘病生活を送るかつての友人の様子を見たビヴァンクは、シュウォブの孤立をユダヤ人であることに結びつけている。確かに、当時のシュウォブは孤独だった。ドレフュス事件期に関する意見対立でドーデやポール・ヴァレリーと決別し、ルナールやポール・クロードル、ポール・レオトーといった友人たちとも疎遠になっていた。しかしそれは、病によって作家活動が続けることができず、次第に性格が狷介になったシュウォブの周囲から人が離れていったためであり、決して彼がユダヤ人であったことが理由ではない。また、ここに見られる「シュウォブ自身はユダヤ人に肩入れすることはなかった」という奇妙な「弁解」は、ユダヤ人の友人について語る非ユダヤ人に典型的な語りでもある。反ユダヤ主義者ではないオランダ人ビヴァンクでさえ、シュウォブを追悼する際に「彼のユダヤ人という出自」に言及せずにはいられなかった。

結びとして

本稿で私たちは、シュウォブのユダヤ意識について『1891年バリのオランダ人』を対象として考察してきた。事実上のもう一人の著者としてシュウォブが関わった同書から明らかになったのは、叔父レオン・カーンのユダヤ意識と、彼を通じて語り継がれるカーン家の伝説である。叔父が伝えたカーンの末裔としての意識は、確実にシュウォブへも受け継がれていたことは、友人たちが証言するとおりである。また、モレアスに関してシュウォブ自身が述べた人種観は、反ユダヤ主義言説へと吸収されればそのままユダヤ系フランス人に襲いかかってくるものでもあることを確認した。伝統的ユダヤ教徒であるカーン家の血を受け継ぐ者としての自己意識を持ちながらそれについて公に語らず、それでもなお自身を「ユダヤ人」と見なす視線の中で生きたシュウォブの姿を、オランダ人文献学者の著作について考察することで明らかにすることができた。

本稿の問題意識をさらに掘り下げるため、今後はシュウォブ家から出たもう一人の芸術家に着目する必要を感じている。シュウォブの姪リュシー・シュウォ

ブ (Lucy Schwob, 1894-1954) は、母が非ユダヤ人であるにも関わらず、ユダヤ人にとっての激動の時代に「クロード・カーアン」を名乗った。ドレフュス事件期にナントのコレーージュで級友から反ユダヤ主義的嫌がらせを受けイギリスへ避難した彼女は、それでも祖母マチルド——レオンの姉でありマルセルの母——の姓「カーアン」を自らの筆名として採用したのだ。「あからさまに「ユダ公」(youtre) のもの⁽⁴³⁾」と自ら認める姓をあえて名乗り、占領期にはゲシュタポに逮捕され死刑判決を受けたリユシーを、ユダヤ系フランス人としてのマルセル・シュウォブを主題とする執筆者の一連の研究に位置付けることを今後の課題としたい。

註

- (1) 執筆者がシュウォブという作家を反ユダヤ主義の時代に生きたユダヤ系フランス人としてとらえ研究する意図については、次の二編の拙論をご参照いただきたい。「世紀末のユダヤ系作家——マルセル・シュウォブ『少年十字軍』をめぐって」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第90号、168-181頁、2007年4月および「文学テキストにおけるユダヤ姓について——マルセル・シュウォブ『黄金仮面の王』」、『ユダヤ・イスラエル研究』、日本ユダヤ学会、第23号、13-23頁、2009年3月。
- (2) Pierre Champion, *Marcel Schwob et son temps*, Grasset, 1927, p.11.
- (3) Pierre Champion, «Préface» des *œuvres complètes de Marcel Schwob*, François Bernouard, vol I, 1927, p.VIII.
- (4) 両者の交友と、反ユダヤ主義者ドーデが見たユダヤ人としてのシュウォブについては拙稿「Marcel Schwob vu par Léon Daudet: un écrivain juif dans le courant antisémite」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第92号、18-33頁、2008年4月をご参照いただきたい。
- (5) Léon Daudet, «Le Châtiment», in *Le Figaro*, 6 janvier 1895.
- (6) Léon Daudet, «L'Entre-deux-guerres» (1915), dans *Souvenirs et polémiques*, Robert Laffont, 1992, p.276.
- (7) *Idem.*
- (8) Monique Jutrin, *Marcel Schwob: «Cœur double»*, Lausanne, Éditions de l'Aire, 1982, p.26.
- (9) 「三つの卵」は1888年4月23日にシュウォブの父ジョルジュがナントで経営す

- る日刊紙『ロワールの灯台』(*Le Phare de la Loire*)に発表される。次いで1891年2月15日に『エコー・ド・パリ』誌に再掲され、後に「卵物語」(«Le Conte des œufs»)と改題し第一コント集『二重の心』に収められる。
- (10) この時期のシュウォブは、友人のジョルジュ・ギエース(1869-1889)とともにヴィヨン研究を進めていた。その成果は両者の共著『フランス語の隠語に関する研究』(Marcel Schwob et Georges Guieysse, *Étude sur l'argot français*, Émile Bouillon, 1889)として出版された。
- (11) アントワープ大学のクリスティアン・ベルグは、オランダのハーグ王立図書館、国立図書館、ライデン大学図書館に所蔵されているビヴァンクに関連する書簡を調査し、シュウォブとの交流について明らかにしている。Christian Berg, «Marcel Schwob et Willem Byvanck», in *Retours à Marcel Schwob: D'un siècle à l'autre (1905-2005)*, Rennes, Presse Universitaires de Rennes, 2007, pp.203-218.
- (12) Léon Daudet, *op. cit.*, p.382.
- (13) Willem Geertrudus Cornelis Byvanck, *Un Hollandais à Paris en 1891: Sensations de littérature et d'art*, Perrin, 1892.
- (14) フランス語版の出版に先立って『メルキユール・ド・フランス』誌に詩人ジャン・モレアスに関する章の抜粋が掲載されている。W.G.C. Byvanck, «Poésie romane», in *Mercure de France*, n° du 1^{er} avril 1892, pp.289-294.
- (15) ビヴァンクとユレの著書に共通して登場するのは、バレス、マラルメ、ヴェルレーヌ、ロニー、マンデスの六名である。
- (16) Sylvain Goudemare, *Marcel Schwob ou les vies imaginaires*, Le Cherche midi éditeur, 2000, p.125.
- (17) シュウォブは、文壇に大きな影響力を持つ作家の名を挙げ「アナトール・フランスかバレスに頼むつもりです」とビヴァンクに告げている。シュウォブの希望通り、同書はフランスによる序文付きで、バレスの版元であるペラン社より出版される。Christian Berg, *op. cit.*, p.213.
- (18) ヴアレットは編集主幹を務める『メルキユール・ド・フランス』誌上で二度にわたってビヴァンクの著書について賞賛しつつ内容を紹介している。Alfred Valette, «Un Hollandais à Paris en 1891», in *Mercure de France*, n° du 1^{er} avril 1892 et «Sur Un Hollandais à Paris en 1891», in *Mercure de France*, n° du 1^{er} juin 1892.
- (19) 1892年6月18日付けのアレイ・プリンス宛て書簡。Joris-Karl Huysmans, *Lettres inédites à Ary Prins, 1885-1907*, Genève, Droz, 1977, p.240.
- (20) Bernard Lazare, l'article des *Entretiens politiques et littérature*, cité par Goudemare, *op.cit.*, p.117.
- (21) Marguerite Cahun, «Une jeunesse Quai Conti 1885-1900», in *Europe*, numéro

- sécial consacré à «Marcel Schwob», n° 925, mai 2006, pp.53-64.
- (22) «M. Léon Cahun», in *Le Phare de la Loire*, 31 mars 1900.
- (23) Léon Cahun, *Introduction à l'histoire de l'Asie: Turcs et Mongols des origines à 1405*, Armand Colin, 1896.
- (24) Léon Cahun, *La Bannière bleue. Aventures d'un musulman, d'un chrétien et d'un païen à l'époque des croisades et de la conquête mongole*, Hachette, 1877.
- (25) 『青い旗』はテオフィル・ゴーチエの『キャプテン・フラカス』等とともに Francis Lacassin (éd.), *Aventures pour tous les temps*, Robert Laffont, 1989に収録されている。
- (26) «La Génération d'hier», dans Byvanck, *op. cit.*, p.150.
- (27) ユダヤ系フランス人が反ユダヤ主義言説によって異人種と見なされる状況に関して次は次の拙論をご参照いただきたい。「セム族としてのマルセル・シュウオブ——十九世紀末フランスにおける人種理論をめぐって」、『ユダヤ・イスラエル研究』、日本ユダヤ学会、第27号、pp.13-22、2013年12月。
- (28) «Un Peuple ancien», dans Byvanck, *op. cit.*, p.263.
- (29) Pierre Champion, «Préface» des *œuvres complètes de Marcel Schwob*, *op. cit.*, pp. VII-VIII.
- (30) Béatrice Philippe, *Les Juifs et l'identité française*, Odile Jacob, 2016, p.193.
- (31) Léon Cahun, *La Vie juive*, Illustrations d'Alphonse Lévy, 1886, Monnier, Brunhoff et Cie, 1886, pp.98-99.
- (32) Zadoc Kahn, «Préface» de *La Vie juive*, *op. cit.*, p. III.
- (33) Freddy Raphaël, «L'Alsace de Zadoc Kahn», in *Zadoc Kahn, Un grand rabbin entre culture juive affaire Dreyfus et laïcité*, Édition de l'éclat, 2007, p.17.
- (34) Zadoc Kahn, *op. cit.*, p.III.
- (35) Édouard Drumont, *La France juive, essai d'histoire contemporaine*, C. Marpon et E. Flammarion, tome1^{er}, 1886, p.III.
- (36) *Ibid.*, p.390.
- (37) «Un Peuple ancien», dans Byvanck, *op. cit.*, p.265.
- (38) «Critiques amicales», dans Byvanck, *op. cit.*, pp.81-82.
- (39) Félicien Pascal, «La semaine littéraire», in *La Libre parole*, 28 novembre 1892. 評者パスカルは、シュウオブのコント「黄金仮面の王」(「Le Roi au masque d'or」, 1892)のモチーフである「仮面」をユダヤ系フランス人の偽りの同化の象徴であるとして、「ユダヤの技法にだまされてはいけない」と反ユダヤ主義新聞の読者に警戒を呼びかける書評を発表した。
- (40) «Retour dans la nuit», dans Byvanck, *op. cit.*, pp.303-304.

- (41) Sylvain Goudemare, *op. cit.*, p.313.
- (42) W. G. C. Byvanck, «Marcel Schwob (1867-1905)» in *De Gids*, 2 mai 1905, pp.330-352, traduit du néerlandais par Christian Berg, «Marcel Schwob par W. G. C. Byvanck», in Christian Berg et Yves Vadé (dir.), *Marcel Schwob: d'hier et d'aujourd'hui*, Seyssel, Éditions Champ Vallon, 2002, pp.39.
- (43) Claude Cahun, «Confidence au miroir», dans *Écrits*, Jean-Michel Place, 2002, p.593.